四つ仮名対立の消失過程

――高知県中村市・安芸市の場合――

久野マリ子・久野眞・大野眞男・杉村孝夫

キーワード：四つ仮名，子音変化，音環境，摩擦音，破擦音，高知方言

要　旨

音韻体系としての四つ仮名から二つ仮名への移行は、「ヂ・ヅ」の語中における摩擦音化、「ジ・ズ」の語頭・撥音の後における破擦音化の二つの音変化の複合である。この変化に際しては、音環境・形態環境などの言語内的条件により遅速がみられる。高知県方言の場合においては、語頭・撥音の後、連濁、同字反復などの要因が関与している。四つ仮名体系から二つ仮名体系への移行時期は地域差があり、安芸市の場合、中村市よりも十年程度早い。

はじめに

四つ仮名の音韻的対立とは、歴史的仮名遣いにおいて「ヂ・ジ・ヅ・ズ」で表される四つの音節の対立を指す。国語史上、中央語である京都方言では近世初期に既にその対立が失われているが、方言においては高知方言・鹿児島方言などに現在でも残存しており、大分方言においては三つ仮名（ジ・ヅ・ズ）の形も残されていることなどは、既に柴田武（1960）などにより広く知られている。本論は、このうち高知県方言をとりあげ、中村市・安芸市で実施した四つ仮名の発音と意識についての数量調査に基づき、音韻体系としての四つ仮名の二つ仮名への変化過程を、音環境・形態環境などの観点から分析したものである。[注1] なお、中村市・安芸市調査の全話者の具体的音声と仮名意識の実態は、久野マリ子・久野眞・大野眞男・杉村孝夫（1991）として報告されており、本論の分析はこれに基づく。

1．調査の概要

調査地点については、高知県方言全体が大きく東西に二分されるため、比較の観点からそれぞれの地域から選定した。西の幡多方言からはその中心地である中村市を選んだ。東の高知方言からは、中心地である高知市で四つ仮名の崩壊が既にかなり進んでいるため、中村市に相当する程度の規模を持つ安芸市を選定した。

中村市の調査は1987・1988年に行なった。1987年度は、数量調査の前提として四つ仮名音声の実態把握のための基礎調査を行なった。1988年度はこれに基づき、21歳から73歳の生え抜きの話者89名を対象に数量調査を実施した。安芸市は、1989年に19歳から82歳の生え抜きの話者94名を対象に数量調査を実施した。年齢層別に示すと表1の通りである

（２） 四つ仮名対立の消失過程

(女性は〈 〉内に示した)。70歳以上の話者数が安芸市に対して中村市が少なくなっているのは、安芸市においては、中村市のように60歳台で安定的な四つ仮名対立の状態が確認できず、70歳以上に遡って話者を求めなければならなかったことによる。中村市においては70歳以上の発音実態が60歳台と特に異ならないため、統計処理では60歳以上のカテゴリーに統合してある。

表１　話者年齢構成

年齢層	30歳未満	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台	70歳以上
中村市	12＜6＞	17＜9＞	16＜8＞	18＜8＞	22＜14＞	4＜3＞
安芸市	11＜5＞	11＜7＞	16＜9＞	20＜8＞	17＜11＞	18＜11＞

調査は、発音・発音意識・仮名遣い・四つ仮名に対する意識等について面接で行なった。このうち、本論で対象とするのは発音調査の結果である。調査方法は原則として謎々式を採用し[注2]、可能なものについては絵の呈示も併用して得られた発音を記述した。

調査語は、歴史的仮名遣いにおいて「ヂ・ヅ」の仮名を含むものをD群、「ジ・ズ」の仮名を含むものをZ群に分けた[注3]。更に音韻的・形態的条件などを考慮して、以下の語を調査した[注4]。なお、中村市調査では、歴史的仮名遣いとの対応を考慮して語を選んだが、安芸市調査では音環境・形態環境等への考慮を更に重視して語を補った。なお、安芸市で追加した語は＊で示した。

D群……痔、地震、頭巾、図工、心中*、缶詰、鼻血、三日月、縮む、鼓、続く、藤、舵、明治、生地*、肘*、筋*、泥鰌、水、静岡、屑、恥ずかしい、小豆、鶉*、杯*、疼く*

Z群……字、神社、自転車*、磁石*、ずるい*、髄*、十五夜、三時、杏*、三寸*、猫舌*、色白*、消し炭*、床擦れ*、蜆、鈴、雀、硯、涼しい、富士、火事、虹、匙、刑事、雉*、葛、鼠*

2. 老年層における四つ仮名音声の実態

高知県中村市・安芸市ともに、若年層では四つ仮名の発音上の区別はほとんど見られな

いが、老年層においては明瞭な音韻的対立として四つ仮名体系が認められる。[注5] 中村市の老年層の音韻体系全般と四つ仮名に関する音韻解釈の詳細は、久野眞 (1989) に示した。以下に、四つ仮名に関する老年層の音声実態と音韻解釈を略述する。[注6]

「ジ」は、語中・語頭および撥音の後においてもほぼ安定的に摩擦音の［ʒi］であるのに対して、「ヂ」は通常の破擦音［dʒi］であり、「dʑi］のような破裂の要素の強い音声はあまり聞かれない。また、［ⁿdʒi］のようにしばしば入り渡りの前鼻音を軽く伴うことがあり、この傾向は語中において顕著である。[注7]

「ズ」は語中・語頭および撥音の後においてもほぼ安定的に摩擦音の［zu］である。これに対して、「ヅ」は通常の破擦音［dzu］から破裂の要素の大きな破擦音［dᶻu］までの幅の異音を持つ。話者や語例によっては、[du]のような破裂音に限りなく近く聞こえることがあるが、自然な発音においては破擦音のカテゴリーとして扱った。なお、軽い入り渡りの前鼻音は、「ヂ」と同様に伴う傾向がある。

表 2-1　中村 D 群　年齢別破擦音率

語/年齢層	六十歳以上	五十歳以上	四十歳以上	三十歳以上	三十歳未満
語頭及び撥音の後					
痔	80.8	72.2	56.3	76.5	83.3
地震	92.3	83.3	68.8	82.4	91.7
頭巾	92.3	61.1	50.0	82.4	83.3
図工	88.5	50.0	62.5	88.2	75.0
缶詰	92.3	72.2	93.8	88.2	91.7
連濁					
鼻血	96.2	77.8	56.3	70.6	41.7
三日月	88.5	66.7	62.5	76.5	50.0
同字反復					
縮む	92.3	55.6	43.8	41.2	25.0
鼓	84.6	61.1	56.3	41.2	25.0
続く	80.8	50.0	37.5	52.9	25.0
その他					
藤	69.2	16.7	18.8	35.3	41.7
舵	80.8	50.0	43.8	35.3	33.3
明治	73.1	44.4	25.0	41.2	41.7
泥鰌	53.8	38.9	31.3	11.8	25.0
水	80.8	33.3	43.8	23.5	16.7
静岡	88.5	38.9	12.5	17.6	8.3
屑	61.5	5.6	25.0	29.4	41.7
恥かしい	76.9	33.3	12.5	23.5	16.7
小豆	84.6	44.4	37.5	23.5	25.0

また、D群（ヂ・ヅ）については、破擦音と摩擦音との揺れが主として中年層を中心に観察される。体系変化による過渡的現象と解釈されるが、統計処理上破擦音として扱った。また、主としてZ群において有声歯裏音あるいは歯間音[ð]が聞かれることがあり、D群においてもまれに観察される。

これらの音声観察から、中村・安芸方言における四つ仮名音声の対立は、閉鎖音/d/と摩擦音/z/の対立と見なすよりは、破擦音/ʒ/と摩擦音/z/との子音対立と想定する方が、より音声実態にふさわしい。また、いわゆるタ行子音を破裂音/t/と破擦音/c/とに分ける解釈を前提とするならば、その音声に対応する四つ仮名方言のダ行子音も破裂音/d/と破擦音/ʒ/とに分けるのが妥当な解釈と考えられる。[注8]

3. 四つ仮名消失過程

3.1. 調査語のカテゴリー

中村市・安芸市における四つ仮名発音の動態を分析する上で、中村市における基礎調査を踏まえて、音環境・形態環境など、該当する四つ仮名音節が置かれた種々の言語内的条件を考慮した。すなわち、調査対象とした語を〈語頭・撥音の後〉〈連濁〉〈同字反復〉〈その他〉の四つのカテゴリーに分類した。

表2-2 中村Z群 年齢別摩擦音率

語/年齢層	六十歳以上	五十歳以上	四十歳以上	三十歳以上	三十歳未満
語頭及び撥音の後					
字	88.5	77.8	62.5	35.3	33.3
神社	61.5	55.6	18.8	17.6	0.0
十五夜	69.2	66.7	50.0	29.4	25.0
三時	57.7	61.1	12.5	35.3	8.3
同字反復					
蜆	92.3	100.0	75.0	88.2	83.3
鈴	96.2	100.0	100.0	82.4	91.7
雀	96.2	100.0	93.8	88.2	83.3
硯	100.0	88.9	100.0	94.1	91.7
涼しい	96.2	83.3	75.0	88.2	91.7
その他					
富士	88.5	94.4	75.0	76.5	33.3
火事	92.3	94.4	68.8	64.7	50.0
虹	84.6	94.4	75.0	64.7	75.0
匙	84.6	100.0	81.3	52.9	75.0
刑事	92.3	88.9	87.5	64.7	66.7
葛	76.9	77.8	68.8	52.9	58.3

〈語頭〉とは「頭巾」のように語の頭位に四つ仮名音節が置かれた場合、〈撥音の後〉とは「杏」のように撥ねる音の後に置かれた場合の音環境を指す。なお、〈撥音の後〉は、破擦音率・摩擦音率ともに〈語頭〉と同様の傾向を示しているため[注9]、統計処理上同じカテゴリーとして扱った。〈連濁〉とは、「鼻血」のように、語の頭位にあって本来は清音であった音節が複合形態の後部要素となることによって濁音となっているものを指す。〈同字反

表 3-1　安芸 D 群　年齢別破擦音率

語/年齢層	七十歳以上	六十歳以上	五十歳以上	四十歳以上	三十歳以上	三十歳未満
語頭及び撥音の後						
痔	88.9	100.0	80.0	100.0	100.0	100.0
地震	100.0	94.1	85.0	100.0	100.0	90.9
頭巾	100.0	94.1	65.0	62.5	81.8	90.9
図工	94.4	88.2	80.0	81.3	54.5	72.7
心中	61.1	70.6	85.0	81.3	100.0	100.0
缶詰	100.0	94.1	90.0	93.8	100.0	81.8
連濁						
鼻血	100.0	70.6	50.0	68.8	63.6	27.3
三日月	94.4	58.8	55.0	37.5	45.5	18.2
同字反復						
縮む	94.4	76.5	60.0	50.0	36.4	27.3
鼓	94.4	70.6	45.0	37.5	36.4	9.1
続く	94.4	64.7	45.0	43.8	18.2	18.2
その他						
藤	77.8	41.2	25.0	12.5	18.2	9.1
舵	77.8	58.8	25.0	25.0	45.5	36.4
明治	55.6	64.7	25.0	25.0	18.2	9.1
生地	83.3	47.1	35.0	18.8	18.2	9.1
肘	72.2	35.3	25.0	12.5	18.2	18.2
筋	55.6	23.5	30.0	25.0	27.3	27.3
泥鰌	33.3	35.3	35.0	12.5	36.4	0.0
水	33.3	5.9	0.0	6.3	18.2	18.2
静岡	83.3	47.1	35.0	18.8	0.0	0.0
屑	50.0	23.5	25.0	12.5	18.2	18.2
恥しい	61.1	23.5	20.0	6.3	0.0	0.0
小豆	94.4	47.1	30.0	18.8	0.0	0.0
鶉	77.8	52.9	30.0	12.5	9.1	0.0
杯	94.4	52.9	25.0	18.8	27.3	9.1
うづく	100.0	52.9	50.0	25.0	9.1	0.0

復〉とは「ちぢむ（縮）・しじみ（蜆）」のように仮名遣い上同一の仮名を濁って繰り返す場合をいう。

表2—1は中村市におけるD群各語の破擦音率を表す。破擦音率とは、歴史的仮名遣いで「ヂ・ヅ」の語を中村・安芸で破擦音で発音した割合である。表2—2は同じく中村市のZ群

表3-2　安芸Z群　年齢別摩擦音率

語/年齢層	七十歳以上	六十歳以上	五十歳以上	四十歳以上	三十歳以上	三十歳未満
語頭及び撥音の後						
字	77.8	64.7	60.0	18.8	27.3	18.2
神社	38.9	41.2	25.0	6.3	0.0	0.0
自転車	72.2	52.9	30.0	18.8	18.2	18.2
磁石	55.6	52.9	35.0	12.5	9.1	9.1
ずるい	100.0	76.5	85.0	56.3	63.6	45.5
髄	88.9	76.5	85.0	56.3	27.3	27.3
三時	50.0	17.6	45.0	6.3	9.1	18.2
杏	94.4	64.7	50.0	43.8	9.1	9.1
三寸	94.4	70.6	60.0	43.8	18.2	18.2
十五夜	66.7	52.9	50.0	12.5	9.1	0.0
連濁						
猫舌	94.4	82.4	85.0	62.5	63.6	81.8
色白	100.0	88.2	90.0	81.3	81.8	100.0
消炭	88.9	100.0	90.0	87.5	90.9	45.5
床ずれ	55.6	41.2	75.0	81.3	90.9	100.0
同字反復						
しじみ	94.4	100.0	85.0	93.8	90.9	100.0
鈴	94.4	94.1	95.0	93.8	100.0	100.0
雀	88.9	88.2	95.0	100.0	81.8	100.0
硯	100.0	88.2	95.0	93.8	100.0	90.9
涼しい	100.0	94.1	100.0	81.3	90.9	100.0
その他						
富士	100.0	88.2	95.0	81.3	54.5	90.9
火事	100.0	88.2	90.0	81.3	36.4	81.8
虹	100.0	100.0	95.0	81.3	90.9	100.0
匙	100.0	82.4	90.0	68.8	72.7	81.8
刑事	94.4	82.4	90.0	87.5	54.5	54.5
雉	94.4	100.0	95.0	93.8	81.8	100.0
葛	77.8	52.9	45.0	31.3	54.5	36.4
鼠	94.4	76.5	85.0	100.0	100.0	100.0

各語例の摩擦音率を表す。摩擦音率とは、同様に歴史的仮名遣いで「ジ・ズ」の語を摩擦音で発音した割合である。ともに各年代層ごとの平均値で示している。また、表3—1は安芸市におけるD群の破擦音率を、表3—2はおなじく安芸市のZ群の摩擦音率を、各年代層別に示している。

これらの表より、語ごとの発音のばらつきがある程度存在することがわかる。四つ仮名の音韻対立が一般的に認められる老年層においても、ことにD群〈その他〉のカテゴリーで、「藤・明治・泥鰌・屑・筋・水・恥ずかしい」のように低い破擦音率になっているものが多い。このことから、四つ仮名発音の実態は、「舵/火事」「藤/富士」などのようなごく限られた少数のペアの調査を行なっただけではその全容が把握しきれないことがわかる。

3.2. D群の破擦音率

図1—1は、中村市D群の破擦音率の年代層別平均値を、各条件別に比較したものである。60歳以上においてはいずれの条件とも高い数値を示し、おおむね四つ仮名D群本来の発音である破擦音で発音されている。全体的に年齢層が下がるにつれて各条件とも破擦音率は下がっていき、摩擦音にとって代わる傾向にある。

〈語頭・撥音の後〉は、50歳台・40歳台でやや下がるものの、全般的に見て最も高い破擦音率を示しており、〈語頭・撥音の後〉の音環境が支えとして機能し、破裂の要素が残りやすくなっていることがわかる。なお、30歳台以下で再び上昇しているが、これは後述する〈語頭・撥音の後〉におけるZ群の破擦音化と軌を一にするものである。〈連濁〉についても、30歳未満では大きく落ち込むものの、30歳台までは〈語頭・撥音の後〉に準じるような比較的高い破擦音率を示す[注10]。次いで〈同字反復〉も比較的緩やかに破擦音率の減少を示している。〈連濁〉のような語構成意識や〈同字反復〉のような仮名遣い意識が、かなりの程度四つ仮名発音の弁別のための支えとなって機能していることが明らかである。

これらに対し、語中において特にそのような支えのない〈その他〉においては、最も破擦音率の低下が著しく、ほぼ50歳台において既に四つ仮名本来の破擦音率が下がりきってしまっている。条件別の破擦音率の減少傾向は、

語頭・撥音の後 ＜ 連濁 ＜ 同字反復 ＜ その他

という順で大きくなっていることが確認される。

図2—1は、安芸市D群の破擦音率の変化である。〈語頭・撥音の後〉は、中村のように中年層で中だるみせずにほぼ全年齢層にわたって高い破擦音率を示している。また、〈連濁〉〈同字反復〉が破擦音を残しやすく、何の支えもない〈その他〉はいち早く摩擦音にとって代わられていることが確認される。これらの条件別の減少傾向は、ほぼ中村の場合と同様である。これは、この傾向が中村あるいは安芸に固有のものでなく、ある程度の一般性を有することを示している。

以上の分析により、D群の音変化は語中において破擦音が摩擦音化することが基調となっていることが確認された。中村と安芸で大きく異なる点は、破擦音率が下がり始める時期についてである。中村では60歳台までは各条件ともかなり高い数値であるが、安芸では、

〈語頭・撥音の後〉以外の条件では既に60歳台において大きく破擦音率が下がり始めており、中村の50歳台に相当する数値となっている。

3.3. Z群の摩擦音率

図1—2は、中村市Z群の摩擦音率の年代層別平均値を、各条件別に比較したものである。[注11] 60歳以上においてはいずれの条件とも高い数値を示し、おおむね四つ仮名Z群本来の発音である摩擦音で発音されている。

〈同字反復〉はすべての年代層にわたり高い数値を示している。これは、〈同字反復〉における仮名遣い意識が、Z群本来の摩擦音を残す支えとして強く働いていることを示していると解釈される。一方、何の支えもない〈その他〉の条件では年齢層が下がるにつれてかなり緩やかに摩擦音率が下がっている。これは、語中のZ群が若年層においてやや破擦音化する傾向を示している。[注12]

〈語頭・撥音の後〉は、既に60歳以上においてやや低い数値となっており、30歳未満の若年層ではほぼ破擦音にとって代わられている。全般的な摩擦音率も最も低い。これは、〈語頭・撥音の後〉の音環境が、D群の破擦音率の場合と同様、他に比べて破裂の要素を導きやすいことによると考えられる。

図2—2は、安芸市Z群の摩擦音率である。〈同字反復〉は、中村と同様全年代層にわたって高い摩擦音率を示している。〈その他〉も、中村と同様に緩やかな下降傾向を示している。中村では調査語になかった〈連濁〉については、〈その他〉とほぼ同じような推移を示している。D群の場合と異なり、Z群においては〈連濁〉という条件が特に四つ仮名弁別の支えにはなっていないと解釈される。〈語頭・撥音の後〉では摩擦音率の低下すなわち破擦音化が著しいことは中村と同様である。

以上の分析から、条件別の摩擦音率の減少傾向は、おおむね

同字反復 ＜ 連濁 その他 ＜ 語頭・撥音の後

という順で大きくなっている。以上の分析により、Z群の音変化は〈語頭・撥音の後〉において摩擦音が破擦音化することが基調となっていることが確認された。

図1—2および2—2から、中村と安芸ともに〈語頭・撥音の後〉における摩擦音率が急激に下降する時期は、おおむね40歳台である。これに対して、3.2.において見たようにD群破擦音率の下降は比較的高年層においてであった。図1—1および2—1から、何の支えとなる条件のないD群〈その他〉において、中村・安芸ともに50歳台で既に低い破擦音率となっており、明らかにZ群摩擦音率の下降に先行すると考えられる。このことは、高知県方言の四つ仮名消失過程が以下のように継起する二つの音変化によって構成されていることを物語っている。

①語中におけるD群の摩擦音化

②語頭・撥音の後におけるZ群の破擦音化

すなわち、D群とZ群の音韻的対立（四つ仮名の対立）の解消は、語中におけるD群の摩擦音化から生じ、語頭・撥音の後におけるZ群の破擦音化へと波及してするという、相互

図1-1. 中村D群　破擦音率

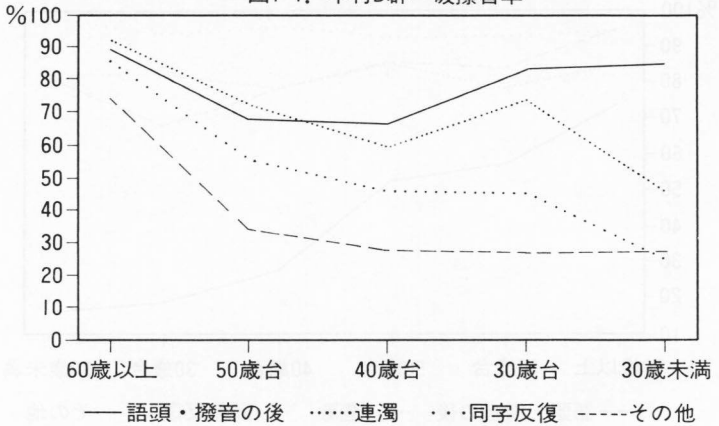


図1-2. 中村Z群　摩擦音率

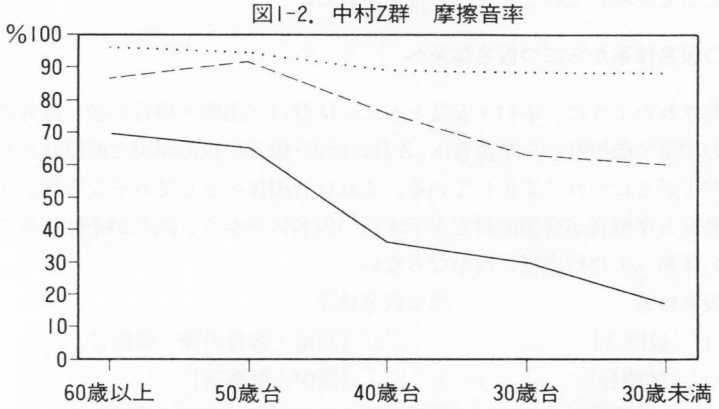
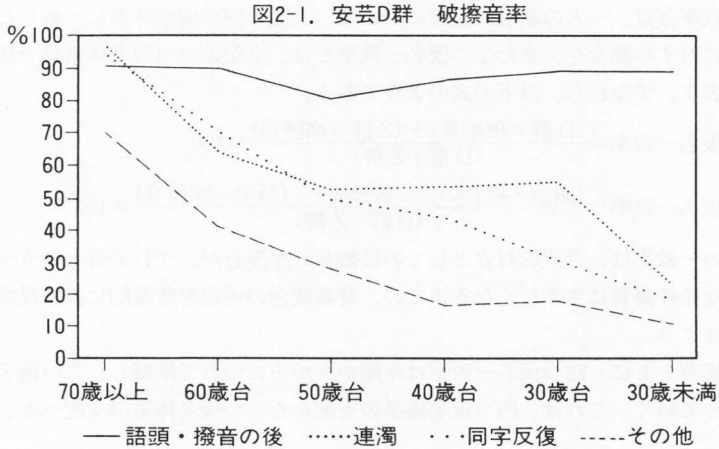
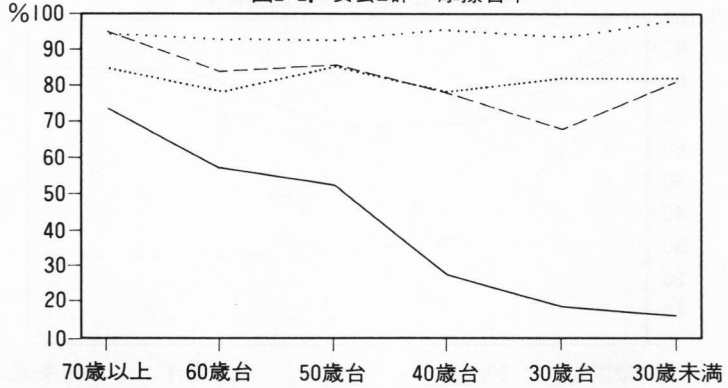


図2-1. 安芸D群　破擦音率



（10） 四つ仮名対立の消失過程

図2-2. 安芸Z群　摩擦音率



的な過程として実現していったことが推定される。

4. 四つ仮名体系から二つ仮名体系へ

3.で確認されたように、中村・安芸ともに、D群は〈語頭・撥音の後〉以外の条件、つまり語中の環境で破擦音から摩擦音へ、Z群は語頭・撥音の後の環境で摩擦音から破擦音へと年齢層が下がるにつれて変化している。これは音韻体系としてみるならば、次に示すような、破擦音と摩擦音が音韻的対立を示す四つ仮名体系から、両者が条件異音の関係となる二つ仮名体系への移行過程にほかならない。

四つ仮名体系		二つ仮名体系
/ʒ/［破擦音］	⟶	/z/［語頭・撥音の後＝破擦音］
/z/［摩擦音］		［語中＝摩擦音］

そこで、変化の両極にある二つの体系に照らして、それぞれの観点からすべての話者についてその一致率を求め、話者の年齢軸との散布図で示したのが図3—1、3—2である。[注13] 四つ仮名一致率とは、一人の話者の発音について、上記の四つ仮名体系に一致した語数の調査総語数に対する割合を、また二つ仮名一致率とは、上記の二つ仮名体系に一致した語数の割合を表す。すなわち、以下の式のようである。

$$四つ仮名一致率=\frac{(D群=破擦音)+(Z群=摩擦音)}{(D群+Z群)}\times 100$$

$$二つ仮名一致率=\frac{(語頭・撥音の後=破擦音)+(語中=摩擦音)}{(D群+Z群)}\times 100$$

この二つの一致率は、音素的対立としての破擦音と摩擦音が、ザ行子音という一つの音素の相補的な条件異音にすぎなくなるまでの、音素統合の過程を数量的に表す尺度と見なすことができよう。

中村・安芸ともに、四つ仮名一致率は年齢が下がるにつれて漸減し、二つ仮名一致率は逆に漸増していく。これは、四つ仮名体系の支配から二つ仮名体系の支配へと、二世代程

図３－1.中村　四つ仮名・二つ仮名一致率

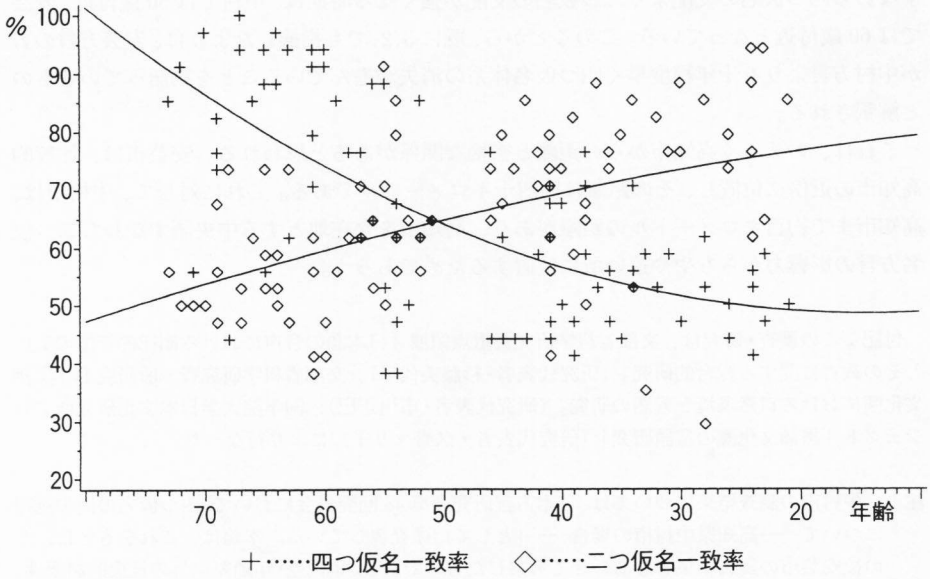
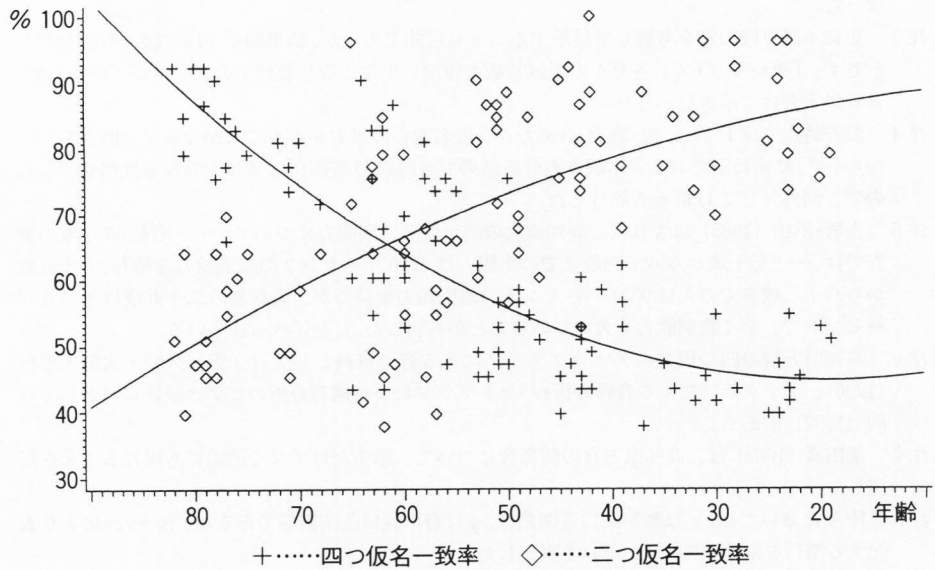


図３－2.安芸　四つ仮名・二つ仮名一致率



度の年月の間に移行していく過程を示している。この二つの一致率の回帰線がクロスする、すなわち四つ仮名の支配より二つ仮名の支配が強くなる時期は、中村では50歳付近、安芸では60歳付近となっている。このことから、既に3.2.でも指摘したように、安芸方言の方が中村方言よりも十年程度早く四つ仮名体系の消失が進んでいることを物語っているものと解釈される。

これは、おそらく高知市からの距離と密接な関係があると思われる。安芸市は、比較的高知市の近傍に位置し、その距離は約四十キロメートルである。これに対して、中村市は、高知市まで約百キロメートルの距離があり、高知市を介在地とする中央語すなわち二つ仮名方言の影響力からもやや遠い所に位置するためであろう。[注14]

付記：この調査・研究は、文部省科学研究費重点領域「日本語の音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」（研究代表者・杉藤美代子）、文部省科学研究費一般研究B「黒潮文化圏における自然環境と言語の研究」（研究代表者・市川正巳）、国学院大学日本文化研究所プロジェクト「黒潮文化圏の言語研究」（研究代表者・久野マリ子）により行なった。

注1　中村市の調査結果については、日本方言研究会第48回発表会において「四つ仮名の消失過程について――高知県中村市の場合――」として口頭発表している。本論は、これをもとに、その後安芸市の調査結果をもあわせて考察したものである。世代差・年齢差以外の社会的諸要件、発音意識、音響面からの分析等については別稿に譲る。

注2　音声記述に際しての判断は、1987年度の中村市基礎調査において調査者共通に形成された聴覚基準によった。また、曖昧な部分については、調査時の録音テープにより相互に確認を行なった。

注3　更にイ段ウ段の別を考慮して呈示することも可能であるが、結果的にイ段ウ段で有意な差を示さず、「ヂ・ジ・ヅ・ズ」各セルの所属語数も極端に少なくなり統計上の妥当性が下がるため、これ以上分けて示さなかった。

注4　調査時点ではD群に「鯨・麹」も含めたが、仮名遣いの歴史からみてもかなり早い時点で「ヂ」から「ジ」に変わっており、本調査の分析結果でも他のD群語例と著しく異なる性格を示したので、例外としてD群から除外した。

注5　土居・浜田（1985）によれば、高知県人の四つ仮名識別能力について「……昭和53年度の調査では、……三十歳から六十四歳までの土佐人は47.0パーセントの識別能力を持ち、六十五歳から八十三歳までの人は93.1パーセントの識別能力を持つが、若年層の二十九歳以下は0パーセントで、全く識別能力を欠いていることが判明した。」と述べられている。

注6　高知県方言の四つ仮名のアナログテープによる音声資料としては久野・久野・大野・杉村（1990）、ソナグラフによる音響分析・パラトグラフによる構音分析のビデオ映像資料としては同（1992）がある。

注7　柴田武（1962）は、高知県方言の前鼻音について、語中だけでなく語頭にも現れることを指摘している。

注8　IPAにおいては、cは無声硬口蓋閉鎖音、ɟは有声硬口蓋閉鎖音であるが、tsを/c/により表記する慣行を勘案して、dzを/ɟ/で表記した。

注9　「缶詰」は、〈撥音の後〉および〈連濁〉の条件が重複しており、一般の〈語頭・撥音の後〉より高い破擦音率を示す傾向があるが、ここではより説明力が大きいと思われる〈撥音の後〉

のカテゴリーに分類した。なお、亀井孝（1950）は、元禄期の京都方言における四つ仮名混同完成後の音声相に関して、

…：〔n～i＝[dʒ]/V～i＝[ʒ]〕：〔n～ɯ＝[dz]/V～ɯ＝[z]〕：…

として、四つ仮名混同後には鼻音の後に破裂の要素が現れることを述べている。

注10　中村市D群〈連濁〉が、次に述べる安芸市D群〈連濁〉のようにストレートに下降せずに、30歳台でいったん上昇している理由は不明である。

注11　中村市調査の段階では、Z群において〈連濁〉のカテゴリーを設定しなかった。

注12　杉藤美代子（1984）は、高知県長岡郡本山町方言において、語中のZ群のこのような破擦音化の傾向を指摘している。このような若年層における破擦音化は、四つ仮名の音韻的対立が消失した後に生じた新しい音変化であると考えられる。すなわち、破擦音と摩擦音が音韻的に対立しなくなったため、語中における異音の幅が拡大して破擦音を生じるようになったものであろう。

注13　分析・作図に際しては、岩手大学情報処理センター大型コンピュータのSAS/GRAPHを使用した。回帰には二次曲線を使用した。

注14　土居重俊（1971）が「高知市で四つ仮名の崩壊度が高く、高知市から遠く離れるに従って、いわゆる周圏的に崩壊度が低くなるといえそうである。」と推定していることとよく符号する。

文献

柴田武　1960　「方言の音韻体系」『解釈と鑑賞』10-9

――― 1962　「語頭の入りわたり鼻音」『土佐方言』3（柴田『方言論』三省堂 1988 再録）

亀井孝　1950　「蜆縮涼鼓集を中心にみた四つがな」『国語学』4

久野眞　1989　「高知県中村市方言の音韻体系」『文部省科学研究費一般研究(B)成果報告書　黒潮文化圏における環境と言語』

久野マリ子・久野眞・大野眞男　1989　「四つ仮名の消失過程について――高知県中村市の場合――」『日本方言研究会第48回研究発表会発表原稿集』

久野マリ子・久野眞・大野眞男・杉村孝夫　1990　『文部省科学研究費重点領域研究　日本語音声平成2年度成果刊行書　四つ仮名方言の音声――高知県中村市・安芸市、鹿児島県枕崎市――』

――― 1991　『四つ仮名方言の動態と意識――高知県中村市・安芸市の数量調査より――』（国学院大学日本文化研究所）

――― 1992　『文部省科学研究費重点領域研究　日本語音声平成4年度成果刊行書　目で見る四つ仮名』

杉藤美代子　1984　「音変化の過程に関する一考察――『四つ仮名』の混同と『ザゼゾーダデド』の混同――」『国語学』138

土居重俊　1971　「高知県における四つ仮名の区別について――20年目の追跡調査――」『高知大学教育学部研究報告』22

土居重俊・浜田数義　1985　『高知県方言辞典』（財団法人高知市文化振興事業団）

――くのまりこ　国学院大学日本文化研究所教授・くのまこと　聖徳学園岐阜教育大学助教授・おおのまきお　岩手大学教育学部助教授・すぎむらたかお　福岡教育大学教授――

（平成6年2月18日　受理）

（平成6年10月17日　改稿受理）